

第4回 府立須知高等学校の在り方検討会議（概要）

- 1 日 時 平成29年10月19日（木）午後3時30分～同5時
- 2 場 所 府立丹波自然運動公園 京都トレーニングセンター研修室
- 3 出席者 14名
府教育委員会 前川教育監、井上高校教育課長、
相馬高校改革担当課長ほか
- 4 概 要
(1) あいさつ
(2) 説明
(3) 意見交換（主な意見）

■説 明

□府教育委員会：資料説明

□京丹波町：視察報告

前回会議で学校長から活性化に向けて食物調理科の設置について案が示され、町設置の須知高校在り方懇話会においても同様の提案をしてきたことから、9月に先進事例として北海道三笠高等学校へ須知高校と一緒に視察を行ったので、内容についてお知らせする。

【概要】

北海道三笠高校は、所在地の三笠市において少子化が深刻であり、平成22年に募集停止されたが、平成24年から三笠市が市立の高校として、改めて開校した高校である。開校に向けては三重県立相可高校をモデルとして指導助言を仰ぎながら1学年40人でスタートし、結果、今日まで募集定員の概ね2倍を超える応募がある。市によれば、市内に学びの場を残すことと、食を通じてまちづくりの拠点として期待できることから、あえて市立に移管して高校として存続させたということであった。

三笠市は札幌市から車で40～50分の位置にあり、人口8,824人、面積が302km²で303km²の京丹波町とほぼ同じ面積、予算規模は一般会計で約100億円、高齢化率は45%超の市である。地元小学校の全児童が289名、中学校の全生徒数が151名で、今年度の中3生数は55名とのこと。学科として調理学科を選んだのは、市の豊富な農作物を食材として活かし活性化を図りたいこと、食というテーマで地域活動が可能なこと、生徒の活動によって街を明るくし市の発展を促進したいこと、が理由に挙げられた。

【開校に向けた課題】

市の協力を得て、生徒数確保のため道内での説明会の実施や、保護者負担の費用への支援策が講じられた。また、市立化に伴う財政負担増については、負担以上の経済効果が期待できること、市の活性化に繋がることを、市民に丁寧に説明されてきた。

【教育活動の概要】

学科に各20名ずつの調理師コース、製菓コースをそれぞれ設定し、調理師コースでは卒業と同時に調理師免許を取得、製菓コースは在学中、通信教育を受けて製菓衛生師国家試験の受験資格を取得できるようになっている。様々なコンクールや地域の食に関するイベントへの参加、地元企業と連携した商品開発などにも取り組んでいる。部活動では調理部、製菓部、地域連携部の三つの部がある。うち調理部では、日曜日に地域の店の一室を借り、天ぷらうどんや親子丼等を販売する活動をされている。三重県立相可高校とも年数回、研究交流を進めたり情報交換をされている。

【今後の課題】

入学生の継続的な確保や、他地域出身生徒がほとんどを占めていることから、卒業後に地元に残ってもらえるよう市内での就職先を確保すること、来年夏に施設完成予定の三笠高校生レストラン運営への準備ということが挙げられた。

□須知高校校長：資料説明

本校は普通科と食品科学科を設置しており、普通科2クラス、食品科学科1クラスで1学年3クラスである。よって概ね3分の2が普通科の生徒であり、また、そのほとんどは地元京丹波町から通学している。したがって、生徒数が減少する状況にはあるが、地元生徒の教育の場として普通科の役割は大変大きいと考えている。

普通科のコースについてであるが、特色ある教育をするために3コース設けている。一つ目はSA（スーパーアドバンス）コースという発展的な内容の学習を行い国公立大学や難関私立大学を目指す生徒に対応するもの、二つ目はアドバンス文理コースという大学、短期大学等への進学希望者に対応するもの、三つ目はスタンダードコースという基礎・基本の定着を主眼において、就職から大学、短大、専門学校と多様な進路希望に対応するもので、各コース毎に特色を持たせている。加えて、探究型学習というさらに特色のある取組を進めようとしているところである。資料のとおり、地域創生に関する探究型学習を、普通科2年生のSAコース10名の生徒たちの特色ある課外活動として、土曜日や放課後、さらに長期休業期間中に行っている。

研究内容は『『森の京都』観光プランコンテスト』に出品しており、書類選考を2作品が通過しているところである。この学習は地域の観光資源の発掘、フィールドワーク、それから提案内容のグループでの検討、応募、発表に向けた資料の作成、プレゼンテーションという流れで行っている。作品については10月28日の土曜日に本戦としてガレリア亀岡においてプレゼンテーションを行い京都府知事賞等が決定されることになっている。

次にウィードに関する探究型学習であるが、普通科の生徒3名と食品科学科の生徒1名が取り組んでいる。これは自主的な活動として、放課後、夏季休業期間中を中心に活動している。第11回全国高校生歴史フォーラム（通称、地歴甲子園）に出品し、約200点の中から五指に入る優秀賞を受賞している。今後、11月に奈良大学でプレゼンテーションを行い、学長賞、奈良県知事賞が決定されていく。

今後の発展についてであるが、これまで個別の取組であった探究型学習を学校全体の取組として発展させていきたいこと、また、地元小・中学校や京丹波町、地域企業等と連携した探究型学習を推進したいということ、さらに関連する大会にこれまで以上に積極的に参加して須知高校の魅力を広くアピールしたいと考えている。

最後に、ウィードの森など日本の農業教育発祥の地の一つであることの強みと、京丹波町の様々な魅力を最大限活用しながら町の地域創生に大きく貢献していきたいと考えているところである。

それから、普通科に関しては部活動強化と関連させて、部活動枠で府内全域、あるいは他府県からも入学させて活性化を図りたいと考えている。具体的には本校のホッケー部のことだが、やはり地元生徒だけでは数が少なく非常に運営が厳しい状況である。今年の府の予選ではおかげさまで男女ともに全勝で勝ち進み、今度近畿大会を迎える。今年は部員数が11人以上いることから良い成績を残しているが、今後を考えると一定外部から生徒を確保できる制度で活性化を図りたい。他府県では中学校まではホッケー部があるが高校には部がなく、続けたい場合には他府県の高校に進学せざるを得ない状況もある。そうした生徒に対応できる選抜制度となつてほしいと考えている。そのことに付随して生徒を受け入れる寮、あるいは下宿、ホームステイが必要と考えている。

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

◇ 調理に関する学科に関連した報告があったが、このことについて意見等あればお願いしたい。

- 数点確認したい。寮を実習施設にしている高校の事例の有無についてはどうか。また、北海道三笠高校の場合、卒業と同時に調理師の資格が得られるが、それは権限として都道府県知事が認めているから自動的にそうなる仕組みなのか。それから北海道三笠高校の場合、ほとんど他地域から生徒が来ているということだが、実習に係る経費は店の収益等である程度カバーできているのか。
- ◆ 寮についてであるが、全国的に調理師免許が取得できる学科の設置校は35校ほどあるが、各校に寮があるかは把握していない。ただ、寮の整備については地方創生交付金を活用されるなどして基礎自治体において整備される傾向が現在の全国的な流れとなっている。資料にある都道府県が設置している高校と併せて寮を整備することについては、新設では現在のところ聞いていない。それから、調理師養成施設の知事指定についてであるが、あくまで指定は知事だが一定の基準が厚生労働省、文部科学省から出されているため、その基準を明確に満たす必要はある。経費については個人負担もあればPTAや地域の方々からの支援など様々である。京丹波町から高校に対してご支援いただいているような仕組みによるケースもあるようである。
- 北海道三笠高校では生徒はほとんどが市外から来ている。従って、当然寮の整備をされており、生徒の95%ほどが入寮している。運営も三笠市が行っている。その他、例えば、毎月の寮費用の1万円分を負担したり、包丁セットの貸与などを市が支援されている。包丁セットについては、生徒に頑張ってほしい、三笠市のまちづくりを一緒にやってほしいという思いを伝えるため、市長自らが貸与式を行っておられるようである。授業等は他の道立高校とほぼ同じ内容で行われていると聞いている。
- 三笠市の面積が302km²で予算規模が100億円程度と、人口は少ないが京丹波町と似ているようである。道立から市立に移管したということだが、施設自体は道営か市営か。それから一般会計予算全体の中で、教育予算はどれほど使われているのか。
- 道立から市立に移る際、おそらく施設その他は譲渡されていると思うが、有償無償は確認していない。しかし、現に三笠市立高校として施設は市が管理しており、教員も市の雇用のため、予算でいうと、例えば、教員は道から派遣という形態を取るため、採用、養成は道教委がしているが、人件費は市負担となる。総額で毎年1億1,200万円ほどである。毎年の教育予算が2、3億円ほどかかっているのではないか。説明によれば、全てが市の単独経費では市民の理解も得られないため、国等の様々な補助金などを活用しながら運営しているとのことであった。
- 須知高校の場合、他校に比べて通学条件の不利は明白だと思う。そのため、保護者の物心両面の負担をできるだけ軽くすることや、生徒の部活動のしやすさに加え、先ほどから出ている調理師資格とか、他地域から生徒を迎える等の基礎となる条件整備として、寮こそが須知高校の在り方を考える際の魅力づくりの基盤になると思う。費用を安く抑えるには調理実習も寮を活用してできるだけ負担を軽くすることを考えないとなかなか大変である。また、前回会議の意見にあったが、丹波自然運動公園の旧施設を活用すれば当面はいけるのではないかとという提案もある。やはり通学条件の不利は明白なのだから、その対応について何とか青写真を描いてほしい。資料には寮費が月額3万円など書かれているが、負担としてなかなか大変だろうと思う。須知高校で獲れた農産物や、近隣農家の農産物等も食事に活用しつつ実習を兼ねて行えば人件費は安く済む。現在は町営バスの運行改善等をされているがそれにも限界があると思う。寮をつくることは、これからの在り方を考える際のキーになる。ぜひ積極的に進めてほしいし、他府県で寮を実習場として活用されているかどうか積極的に調査いただきたい。

- 私も寮が絶対に必要だと考える。以前から言っているが、須知高校ほど通学費が高いところはない。須知高校の説明にあったようにホッケーで遠方から入学出来るようにするとすれば通学はできないため寮が必要である。また、専門教育は寮生活をして初めて成り立つ。府立農業大学校もそうだが、寝食を共にすることは人格形成にも大きな効果がある。調理師と農業科、できれば普通科でも生徒が入れるような総合的な寮をつくるのが大前提だと思っている。府教育委員会は財源がないというが、金は二の次であると言いたい。ないなら今ある府立施設を活用してはどうか。近くにある丹波自然運動公園を活用して運動でも使い、若干改修が必要だが旧宿舍の活用は一つの手だと思う。絶対に話を前に進めてほしい。
- 口丹波ブロックPTAの会合において、亀岡市では中学校卒業後は京都市内の高校に行く、京丹波町では中学校卒業後は園部や亀岡の高校に行く、ということが議題に上った。何とか歯止めをかけないといけないということで、現在、口丹波府立高校PTAで、どうするか話し合おうと進めているところである。京丹波町でいえば和知、瑞穂、蒲生野中学校を卒業した生徒はできるだけ地元の須知高校で止める。亀岡で中学校を卒業した生徒は亀岡高校までで止めて、京都市内へできるだけ行かない流れにしていく。以前のように、町の中学校からは須知高校しか行けないような仕組みにするなどしなければ、このままでは口丹の高校が全て潰れてしまうのではないかと心配が持ち上がっている。そのためになんとか地元の生徒が地元の高校に行くという方向を目指そうと考えているので、府教育委員会においてもお願いしたい。
- ◇ 口丹地域には学区という通学区域があるため、須知高校の普通科に来る子どもは基本的には京丹波町出身で、他地域から進学できるのは定員全体の20%までとなっている。そのため、ほとんどが地元の子どもになると思うが、その子たちにいかにして須知高校に来てもらうかなければ、普通科の魅力についても考える必要があると思うがどうか。
- 公立高校の整備というのは全国水準を踏まえて整備していかなければならず、その努力をされていることは十分了解しているが、結果として条件の良い都市部や通学条件の良い高校にプラスの整備がされると、対して条件が不利な須知高校とでは結果的にその差は一層大きくなる。
例えば、園部高校の京都国際科では4分の3は京丹波町も含め他地域から来ているが、園部高校のような便利な高校にプラスの要素が加わると一層不利になってくる。それをカバーできるだけの手立てを打ってきたか。例えば、SAコースでは特色ある学科があって便利な他校と比較して、生徒や保護者がぜひ行きたいと思うほど魅力が高まっているかということ、大変厳しい状況ではないか。もっと中学生に特別講習等のアプローチをして「私は安心して須知高校のSAコースを選びます。」と思ってもらえる必要があるし、そういう生徒が寮に入って先輩に学びながら頑張れる環境を整えてやれば保護者も子どもも安心していけるのではないか。この地域は塾慣れしていない優秀な子がたくさんいると思う。都会で小学校から塾通いでくたびれている子より伸びしろは大きいと期待している。受検テクニックではなく本当に勉強が好きになる方法を中学と高校で考えて、さらに地域も支援するような特別コースをつくるなどできないか。また、普通科は他地域からも門戸を開き、他地域から取り戻すような措置を積極的に講じてもらいたい。
- この地域の場合、地元中学生の進学先として普通科は必要だと思う。その中で、学力差のある多様な生徒を受け入れる場合、高校にとりあえず進学したいという生徒と、いわゆる難関大学進学を目指す生徒の両方を受け入れられるカリキュラムとして別々のコース設定が必要なため、最低2クラスは維持していかないといけないと思う。また、この地域の生徒が園部や亀岡に出ていく理由として、一つには大学

進学の実績等が影響していると思う。その意味では、SAコースをさらに充実させて、難関大学の合格者が多数出るようになればうまくいくような気がする。昨今、都市部で難関大学に行くような子どもは小学校のときからガチガチに勉強させており、中学、高校時もほとんど勉強漬けでないと合格は難しいと思う。私は山口県東部の岩国高校出身だが、近年、近隣の高校が中高一貫校になった。以前は難関大学への進学希望者は岩国高校に進学するものであったが、中高一貫で実績が出てくると岩国市内からそちらに進学する子どもも出てきているようである。この地域でも中高一貫に近い形態で3中学校と連携し、学習意欲のある生徒を引き続いて須知高校のSAコースへと繋ぎ、難関大学に進める学力をつけていく仕掛けがいないか。また、この地域では有名予備校等での学習機会が少ないので、例えば東進の衛星スクールのようなサポートを高校と中学校が協力して整えることも必要と感じる。

- 中学校においては、保護者面談等進路指導が本格化してきている。中学校としては、生徒の希望や学力、特性、家庭状況等を考えてこの生徒にはどこが適しているのか考えながら面談しているが、その中で高校進学について2点ほど考えることがある。一つは高校に行ってそこで何を学ぶかということと、もう一つは高校を卒業した後どんな進路を考えるか、ということ、生徒にはこの2つのハードルがあると思う。まず、その高校で何を学ぶかについては、須知高校から説明のあった探究型学習は非常に注目されると思う。普通科では国語、理科、数学、社会、英語等を勉強するというイメージをおそらく生徒も保護者も持っておられる。そんな中、須知高校が持つウィードの森や、現在行っているパートナースクール事業といった須知ならではの教育をさらに広げて、「須知高校に行けばこれができる」というものがあれば注目が集まると思う。また、卒業後についてであるが、進路の面談をしていて気がついたのだが、例えば、将来プログラマーになりたい生徒がいる場合、工業系の学習が必要なことから工業系高校に進学しようという発想に立つ。しかし、実際には高校卒業後すぐにプログラマーとして就職するのはなかなか難しいので、大学でさらに勉強しないといけないと思う。この場合中学校としては、高校は普通科を卒業し、大学は理工学部へ進んでさらに高度な学習をするという道筋を考える。須知高校では普通科を出ればこういうところへ行ける、というはっきりした道筋があれば中学校としても指導しやすいし、須知にはSAコースがあるのだから難関大学を目指す生徒はここで勝負ができるぞ、と推せるものがあれば大変嬉しい。

ちなみに、今年度は、前年度に比べ中学3年生の数が減っているにもかかわらず、須知高校普通科への進路希望者は増加している。また、11月頃に変化があるとは思いますが、増えていることはお知らせしておきたい。

なお、先日須知高校の生徒を中学校に招いて先輩に話を聞く会を行った。食品科学科の生徒であったが、須知高校に来て良かったと言っていた。他校ではできないような様々な体験ができる、こんな良いところがあるんだということを話してくれた。先輩の話には影響力があるので、現役の高校生が中学生に須知高校の良いところをもっとアピールしてくれると良いと思う。

- この京丹波町は非常に自然豊かで魅力的で、京都市内や大阪から移住希望の見学等で来られたりするが、子育て世代の方は子どもの教育に非常に興味を持っておられる。小・中学校のほか、高校としては須知高校があると説明すると、高校もあるのかと、それが決め手となって実際に移住されている方もいる。

蒲生野中学校のブロックは、今年度文部科学省から「首長部局との協働による新たな学校モデルの構築事業」の指定を受け、京丹波町ふるさと学校連絡協議会を立ち上げた。今度、町の農林振興や商工観光の部署と一緒に、町にある学校の説明会を行う。学校については幼稚園、保育所から須知高等学校まで紹介し、そして、行政からは子育て支援制度や空き家情報等の情報を提供していただく。その取組を通して何とか子どもの数が増えていけばと考えている。それから、地元の子ど

もにはやはり地元の学校に行ってもらいたいと、小学校もかなり意識している。本校も教育課程内のクラブ活動としてホッケー部をつくり、中学、高校を意識させている。また、従来からキャリア教育の一環として須知高校、ウィードの森に見学を申し込むなどしている。これは本校だけでなく町内の他校も継続して行っている。

それから、保護者、子どもたちにも意識してもらおう取組として、今年度から入学式や運動会、体育祭において、学校名が耳に入るよう祝文を出し合ったり来賓として紹介するなどしているところである。

須知高校のSAコースは魅力的なのでさらに充実してもらいたいし、小学校としても保護者に伝えていく責務があると思うので、小学校段階から須知高校の紹介を行っていききたい。また、土曜日の補習を充実していただくなど、小・中・高校が一緒になって質の高い学力を身につけさせる流れを築いていけないか。この京丹波町には町ならではの人材や素晴らしい教材があふれている。本校児童も総合的な学習の時間において、京丹波町の「食」として農産物について学習している。味夢くんやJAの方に来ていただいたりしているが、高校生に教えてもらうような取組ができれば、高校が児童にとって存在感を増すし、より密接な関係になっていくのではないかと思う。今後、一層連携を密にして進めていきたいと思っているのでよろしく願います。

○ 行政を通じた口丹管内への移住・定住希望の方は年間に概ね60名近くある。そのうち20～30代の子育て世代の方が半分ほどである。その方々はやはり子どもの育てやすさや教育面の魅力ということを意識されている。教育面の魅力とは何かと考えたとき、高校卒業後の魅力としては、いわゆる難関大学に入るなどが考えられると思うが、それはすぐにできることではないと思う。もう一つの魅力として、在学中の学習環境、例えば部活動を考えると、近隣に最新の京都トレーニングセンター、そして素晴らしい運動公園がある。都市部の高校ではグラウンドを探したり、遠方までバスに乗って行くことから考えると、部活動の一層の充実などが色々な地域から来てもらえる魅力づくりになるのかなと思う。

○ 岩手県に不来方（こずかた）高校というホッケーの強い高校があるが、野球部が昨年秋の岩手県大会で準優勝し、また、推薦枠で3月の高校野球選抜大会にも出場した。さらにこの高校は音楽でも実績のある学校らしく、選抜の開会式で国歌を歌ったのも同校の生徒であった。興味が湧いたのでどんな高校かを調べたところ、岩手県矢巾町というところにある学校であった。矢巾町は人口3万人弱、盛岡市のベッドタウンのような町で、人口密度も1㎢当たり413人であり、京丹波町の1㎢当たり45.8人と比べると大きな町である。高校の野球部員は10人なので小さな学校かと思っていたが、生徒数は800人、1学年6～7クラス規模である。盛岡市から300人ほど進学しているようであり、ホッケーだけでなく野球でも、音楽でも特色のある面白い学校という印象を持った。須知高校において同じ内容のことはできないかもしれないが、ホッケーだけでなく野球だとか、調理関係などで日本一を目指すような魅力ある学校になれば、亀岡市、南丹市や中丹地域からも生徒が集まるのではないか。和知地域ではカヌーが強いので部活動をつくっても良いと思うし、須知高校においてホッケーで日本一やオリンピックを目指す、野球でも甲子園を目指す、という思いを持った生徒が寮で高校3年間頑張っていこうとなれば、値打ちも上がるし日本三大農学校というネームバリューも大きく影響すると思う。

現在、町ではホッケーのホストタウン構想、合宿の聖地ということで頑張っている。今年4月にさくらジャパンの選手団がトレーニングセンターで合宿を行った時のことだが、子どもが知り合いの選手に差し入れを持って行った際、選手から第一声として、「ここはご飯が美味しかった。」という感想を聞いたとのことである。これほどの褒め言葉はないと思い、管理栄養士の方に伝えると涙ぐんで喜ばれ、一層頑張るとおっしゃっていた。ここがホッケーの聖地、合宿の聖地、色々なトレーニングの聖地になったら素晴らしいことだし、この地にある須知高校におい

てスポーツを頑張り、ご飯もしっかり食べて、将来も健康で暮らせる強い体づくりができればと思う。

- 三大農学校発祥の地ということで同窓会としても70周年記念事業に取り組んでおり、その中でウィード先生について色々調査し、蓄積したものを活かした資料館をつくらせていただくことになった。これを大いに活用いただくことが大事だと思うし、高校の授業の中でもまず三大農学校発祥の地であること、そしてウィード先生の功績についてもきちんと教えてもらい、在校生が学校に誇りを持つことが第一歩ではないか。我々自身ももう一度この学校が農業教育発祥の地であるということを発信していく必要があると思う。

もう一つ、須知高校は素晴らしい卒業生を輩出していることから、SAコースなどで社会人講師として招くことも考えられる。また、同窓会記念事業では、世界的に有名な太鼓の集団である「鼓童」の方に来ていただくが、他にも活躍されている先輩たちがいる。こういう方たちの生きざまを学べるよう、卒業生を講師として学校で活用することが必要ではないか。

併せて、学校がもっと地域に出て行って相互連携の取組を行っていく、また、その土壌をもっと耕していく必要があると思う。制度だけ変えるのではなく、地域も卒業生も中学校も含めて、須知高校に子どもを送ることで町の地域創生、発展にもつながるのだという意識をもつことが大切である。

- 府教育委員会には、地元の須知高校の活性化に向けて、4回にわたりこのような議論の場を設定いただいたことに感謝する。町としても府の検討会議が始まる前から、須知高校は町になくはならないものとして位置付け、町としてあり方懇話会を設置して提言をいただくなどしてきた。懇話会では地元の子どもの学ぶ場として須知高校の必要性が言われたし、また、町の基幹産業である食のまちづくりの拠点の一つとして、高校から提案された食物調理科の設置という、町としても提案してきた方向で多くの方の賛同をいただけたことは本当にありがたい。京丹波町の近代まちづくりの出発点である農牧学校の発祥の地としての町の誇りを持ち続けるためにも府立高校が必要と考え、府立ではあるが町として全面的に協力するという事で取り組ませていただいた。

今回、普通科に関する意見で、寮あるいは地元企業、関係者と連携して地域を学びのフィールドにさせていただくことは町にとっても大事であるし、それを通して学んだ高校生が将来の夢をしっかりと持てると思う。そのため、本日須知高校から探究型学習を広く普通科に広げていきたいという提案があったが、大いに賛成である。町としても全面協力したいし、また、高校の充実、活性化のために昨年度から支援に係る予算も計上しているが、改めて必要なことには町としても支援を考えていきたいと思っている。この検討会議で多くの提案をいただいたので、町として協力できること、また、町が一緒になって須知高校の活性化に向けて府にお願いしたり、自分たちでできることを今後も考えていきたいと思う。こういう場を設けられたこと、そして、出席された皆さんに多くのアイデアをいただいたことに町として感謝申し上げたい。

[閉会あいさつ]

本日はお忙しい中お集まりいただき、また、これまで大変貴重なご意見を多数いただいたことにお礼申し上げます。今回は特に普通科についてご意見をいただき、また、小・中・高で連携してやっていこうという熱い思いも聞かせていただいて、大変心強く、また、ありがたく思っているところである。今後は、口丹全体の中で高校の在り方について検討させていただくこととしており、その結果については皆様にまた報告させていただきたいと思う。須知高校の魅力ある学校づくり、活性化に向けて、たくさんのご意見をいただいたことに対し、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。